



東京大学教養学部地域文化研究学科イギリス地域文化分科
 〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1 (8号館 317)
 Tel/Fax 03-5454-6304 (イギリス科研究室直通)
 E-mail: british@ask.c.u-tokyo.ac.jp
 Home page: <http://British-Section.c.u-tokyo.ac.jp/>

主任挨拶

中尾まさみ

記録的な猛暑となった夏が終わり、また銀杏並木から学生たちの声が聞こえ始めています。1年間の研修を終えて草光教授も帰国され、イギリス科研究室にもまたいつもの活気が戻ってきました。

イギリス科では、卒業論文指導の一環として、2回の中間発表と提出後の報告の、計3回の口頭発表を課していますが、ここ数年1回の中間発表会は合宿形式をとり、イギリス科全体で1泊旅行に出かけています。今年は6月に千葉県の富津に行きました。発表会は、発表も質疑応答も全て英語で行われ、論文執筆者には緊張の数時間、3年生にはイギリス科流の鍛えられ方を初めて実感する機会になります。上級生の発表を真剣に見つめる3年生が、次の年には下級生の前で堂々と自分の考えを発表するのを目にするのは、私たち教員にとって大きな喜びです。発表会が終われば、皆で懇親会、今年は昨年度の卒業生も花火を持って参加してくれ、賑やかな会になりました。11月には、第2回の発表会を大学で行います。

また10月1日には、地域文化研究学科進学予定の2年生を対象にガイダンスが行なわれ、イギリス科には9名の学生が訪れてくれました。最終的な進学者が決まったところで、内定生の歓迎会を行う予定です。

2ページ目のお知らせにもあるとおり、卒業生の皆様をキャンパスにお迎えするホームカミングデイが、今年から大学行事となり、駒場キャンパスでは教養学部主催の講演会やレセプションなどが行われます。イギリス科研究室も、午後4時から5時半まで開放いたします。ささやかながらお飲み物などを用意してお待ちしますので、どうぞお誘い合わせの上、「古巣」をお訪ね下さい。

剣橋夢一夜

草光俊雄

イギリスには平均して1年に1回ぐらゐの割合で学会や研究会などに出かけてはいたが、1年という単位で滞在するのは20年ぶりだった。以前は10年近く住んでいたのだから、大体のことは分かっているといった顔をしていたものだが、久しぶりに住んでみると、いろいろ勝手が違って思えた。イギリスのことなら私に任せなさいといって家族を連れていった手前かなりカッコウの悪いことでもあった。それはあると思っていたところに店がなく、どこに行ったらあの頃のような安くて美味しいレストランがあるのかと途方に暮れたロンドンに着いた晩から始まった。学会などで行くときにはたいていお仕着せで、飯も連れていってもらったりしているうちにすっかり世間知らずになっていたらしい。この最初の印象はケンブリッジに着いて生活を始めるとますますその実感を強めることになった。この20年近くの間私の知っているイギリスは別のものになってしまったのだなと思うことが多かった。ある意味で思いが強かっただけに失望することも多かった。

とは言え、今回お世話になったガートン・コレッジは私にとっては初めて訪れるところだったが、そのリベラルでフレンドリーな環境のおかげで優雅でリラックスできる生活を送ることが出来た。このことについては前のニューズレターでも少し書いた。コレッジの果樹園のリンゴを好きなだけとって良いと言われてさまざまな種類のリンゴを堪能した秋から、雪に覆われ静まりかえっていた冬、そして次々に新しい花が咲き乱れた美しい春からゆっくりとさまざまな色合いの緑の魅力を見せてくれた初夏、黄金色に色づいた夏の小麦畑と秋めいてきた野の花の8月まで、われわれのケンブリッジ

の1年間はあっという間に過ぎていった。コレッジの行事も盛りだくさんで、クリスマスやパーズ・ナイト、聖パレンタイン、コレッジ・フィーストなどなどハイテーブルに行った晩の学生達の喧噪と陽気な雰囲気は昔を知っているフェローからは必ずしも共感を持たれていたようではなかったようだが(ヴァージニア・ウルフの『私だけの部屋』で描かれたガートンあるいはニューナムのディナーの貧しさ トリニティやキングスと較べてだが)についてはガートンたちには反論があるようだが)学問共同体としてのコレッジがまだ健在な証であり、学生たちが何よりも自分たちのコレッジを愛してとことん楽しんでいる様子には羨望の気持ちを禁じ得なかった。

7月の末に友人のイシュトヴァン・ホント(スコットランド啓蒙思想の研究者・キングスのフェロー)の招待でキングス・コレッジのゲスト・ナイトに美穂と行ったが、ディナーのあとの花火大会、チャペルでのオルガン演奏会など、学生たちのメイ・ボールのフェロー版ともいえるものだった。キングスのゲスト・ナイトには昔行ったことがあったが、派手になったな、というのが印象的だった。このキングスの晩餐会のあと、やはり美穂を初めてガートンの晩餐会(これはコレッジに寄付をしてくれた人たちを招待したものだった)に連れて行った。これでケンブリッジの大学関係の主な催し物が終わり、僕と大学との繋がりが裁たれたようで寂しい気がしたが、すぐに2度目のフランスとイタリアへの旅行があったので気を取り直した。とくに初めて訪れたヴェニスすばらしさに圧倒された。ヴェニスの石ならずヴェニスの街を取り巻く、揺らめくような水の色に目がくらんだと言ってよいだろう。聞くとも見るとでは大違いということをこんなに歴然と体験したのは初めてのことだった。近

世・近代のイギリスがいかにかイタリアから多くのものを負っているか、グランド・ツアーを初めとしてイギリス科の皆さんには自明のことなのだろうが、中でもフローレンス、ヴェニスそしてローマはイギリス人にとってあこがれの都市であり続けている。まだローマには行ったことがないのだが、そのうち是非に思っている。

なんだかイギリスに1年いて遊んでばかりいたようだが、そうです、遊んでばかりいた。とくに嬉しかったことは、暇に飽かせて小説、それも日頃あまり読む機会がなかった18世紀から19世紀にかけてのものを結構たくさん読んだことである。リチャードソンのパメラやジェイン・オースティンの有名なやつはほとんど、パーニーのエヴェリーナなどまで読んだり、ストーン・ヘンジを訪れたのをきっかけにハーディのテスを読み直したりしたのも、今となってはなんて贅沢な時間の使い方だったろうと思っている。

堀越君や新君、永井君に伊東君、そして櫻井さん（皆地域の院生）、本郷の院生で私のゼミにも出ている後藤さんなど、ケンブリッジやオックスフォード、ロンドンで研究している学生たち、また卒業生の菅さんや前助手の渡辺さん、同僚の木畑さん御夫妻など、駒場の関係の人たちが大勢訪ねてくれたのも良い思い出となった。その他日本からさまざまの人が来てくれたが、みなそれぞれ走馬燈のように今は私のケンブリッジ滞在の懐かしいひとこまとなっている。でも帰国してから美穂ともよく話すのだが、われわれは本当にケンブリッジに滞在していたのだろうか、と不思議に思っているというのが今の実感である。それはまるで一夜の夢であったかのように思えるのだ。

イギリス科教員が語るイギリス

毎号ひとりのイギリス科教員からの寄稿でつないでゆく、連作エッセイのコーナーです。あるいは英国から、あるいは他の専門地域から、新鮮な話題を産地直送でお届けしてまいります。

第一回 変わるイギリス

木畑洋一

今年（2004年）には珍しく7月と8月に2度イギリスを訪問することができました。といってもそれぞれ1週間ずつで計2週間にすぎません。イギリス現代史の研究者と称している者としては、毎年まとまった期間イギリスに滞在することが必要なのは分かっていますが、大学で柄にもない役職につかされたりしたことなどのため、このところイギリスにはとんとご無沙汰していました。2000年9月に行つて以来ですから、ほぼ4年ぶりのイギリスということになります。ただ、こうして久しぶりに行ってみると、変化は感じやすくなります。

そして、今回はイギリスが（というよりもロンドンが）少なくともすぐ眼につくいくつかのところで、かなり変わっているのに驚きました。まず、地下鉄の車両で、きれいなものが増えた感じがします。また自分で使ってみることはしませんでした。JRのSuicaカード風のプリペイドチケットであるオイスターカードなるものができていたのにもびっくりしました。また、道を走っている自動車が前に比べると全体として新しいという印象をもちました。10年少し前にロンドンに住んでいた時は、自分自身もオンボロカーに乗っていましたし、あるガソリンスタンドで給油した骨董品級の車がガソリンを堂々とたらしながら走り去ったのに驚いたものですが、その頃に比べてオンボロカーはずっと少なくなったように思われました。そして、気のせいですが、ロンドンの道に落ちているゴミも前に比べて少なくなったように感じました（それでもまだずいぶん汚くはありますが）。

私のこれまでのイギリスとのつきあいの過程で感じてきた変化のなかで、このところの変化はかなり早いのではないかと、今思っています。私が最初にイギリスに行ったのは1960年代末のことで、その次に出かけた1970年代半ばまでの間の変化もまた顕著ではありましたが、その間に通貨の仕組

みは10進法に変わっていましたし、イギリスのEC加盟という事態もありましたから、当然大きな変化は起こっていました。それから時折訪れる度に、イギリスは確かに少しずつ変わってきていました。しかしなぜか今回、私としては一番変化を感じたわけです。

こうした変化の背景にあるのは、おそらくイギリスの今の経済状況のよさだろうと思います。私は、ブレア政権の外交政策、とりわけアメリカと歩調を合わせたのイラク政策などは全く間違っただかと思っていますが、その経済政策がかなり奏功してきていることは確かです。サッチャー政権のもとでのイギリスの経済成長が貧富の差を拡大させたのに対して、ブレア政権下の経済成長で富んだ者も貧しいものもかなり均質な形で受益している点は、評価すべきだと考えています。この経済成長が、ユーロへのイギリスの加盟に消極的な世論を支えているのは皮肉なことで、イギリス観察者の私としては、こうした変化がもう一歩進んでイギリスの通貨がユーロになることを望んでいるのですが、その変化はなかなかみられそうにありません。

ただ、最近のイギリスに大きな変化を感じた私の印象自体が間違っている可能性もあります。ごく短期間の滞在での印象でしたので、それは大いにありうることです。イギリス科の先輩・後輩諸氏にその点の蒙を啓いていただければ幸いです。

イギリス科同窓会延期のお知らせ

今秋に企画されておりましたイギリス科単独での同窓会は、大学全体の同窓会「ホームカミングデイ」が、11月13日に急遽開催される運びとなりました為、ひとまず延期させて頂くことになりました。

ですが、今回のホームカミングデイでも、イギリス科研究室にお飲物などをご用意して皆様をお待ちしております。ご参加の方はどうぞお立寄りください。